

田口ランディ



ぐるぐる日記

筑摩書房

ぐるぐる日記

二〇〇一年一月二十五日 初版第一刷発行

田口ランディ

東京生まれ。広告代理店、編集プロダクションを経て、九〇年代半ばよりノンフィクション作家となる。また、一九九八年より独自のメール・マガジンを発行、ネットコラムニストとして注目される。著書に『忘れないよ！ヴェトナム』（一九九六・ダイヤモンド社）、『癒しの森——ひかりあめふるしま屋久島』（一九九七・ダイヤモンド社）、『スカートの秘密の生活』（一九九八・洋泉社）、『もう消費すら快楽じゃない彼女へ』（一九九九・晶文社）、『馬鹿な男ほど愛おしい』（二〇〇〇・晶文社）、『コンセント』（二〇〇〇・幻冬舎）、『できればムカつかずに生きたい』（二〇〇〇・晶文社）、『アンテナ』（二〇〇〇・幻冬舎）、『ミッドナイト・コール』（二〇〇〇・PHP研究所）、『からだのひみつ』（二〇〇〇・寺門琢己との共著・メディアファクトリー）がある。

著者

田口ランディ

発行者

菊池明郎

発行所

筑摩書房

印刷

明和印刷株式会社

製本

矢嶋製本株式会社

ISBN 4-480-81432-9 C 0095 Printed in Japan

© TAGUCHI RANDY

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送り下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

〒三三三-八五〇七 大宮市榎引町二六〇四

筑摩書房サービスセンター

電話〇四八-六五一〇〇五三

目次

一九九九年五月

世の中つてぐるぐるだなあ……………3

一九九九年六月

長編小説なんて書けるかな……………11

一九九九年七月

明日はいい日でありますように……………27

メールマガジンより①

神社でOSをアップデートする方法……………36

一九九九年八月

肉体と精神は相似形なのだ……………47

一九九九年九月

人生はまったりが大切である……………61

メールマガジンより②

自然をめぐるささいな出来事（その1）……………83

メールマガジンより④	自然をめぐるささいな出来事(その2)	89
一九九九年十月	歯が抜ける夢は転機の前触れ	95
メールマガジンより①	臨界事故をめぐる元JCO社員との往復書簡(前編)	110
メールマガジンより⑤	臨界事故をめぐる元JCO社員との往復書簡(後編)	116
一九九九年十一月	縄文の見えない神々とアイヌ	125
メールマガジンより①	アイヌのシャーマンに学ぶ	142
一九九九年十二月	自我ダイエットしようと思う	145
二〇〇〇年一月	私は古風な人間なのである	165

メールマガジンより⑦
マタギの里を旅する……………176

二〇〇〇年二月
書くことに専念しようと決意……………187

二〇〇〇年三月
私は世界に対して義理がある……………199

二〇〇〇年四月
寂しいような人恋しいような……………219

メールマガジンより⑧
熊野、春の一日……………232

二〇〇〇年五月
人間存在って闇鍋みたいだ……………237

メールマガジンより⑨
道教の道士に漢方を処方してもらう……………254

メールマガジンより⑩
占い、風水、悪霊退治、なんでもありの道教の謎……………262

二〇〇〇年六月

ダサきの果ての薄明かり……………

273

二〇〇〇年十一月

あとがき……………

297

ぐるぐる日記

裝幀・南仲坊

一九九九年五月

世の中ってぐるぐるだなあ

*五月二十三日(日)

ありきたりな

とても

美しい一日

私の週末はご近所づきあい忙しい。

土曜日の夕方は、隣の家のご夫婦と子供を遊ばせながら庭で宴会。暖かい夕暮れで、酒を持ちよって飲んでいるうちにだんだん酔っぱらってしまつて、ついに「温泉に行こう」という事になった。我が家は歩いて五分のところに露天風呂がある。そこにそろそろと二家族で行つて、子供たちは湯船で泳ぎまくり、親は風呂上がりのビールを飲んだ。

日曜日の朝は九時半にミホちゃん一家が遊びに来た。青じそと朝顔とコスモスの苗を持って来てくれたので、それを庭に植える。「もつと草むしりしな

さい」と言われる。ミホちゃんのパパは庭師なのだ。それでなぜだか朝から庭のドクダミを草むしりする羽目になる。野イチゴが熟していたので、子供たちに食べさせる。それから、いっしょに海岸の空き地でやつてるフリーマーケットに行つた。子供たちは朝から大はしゃぎである。

夕方、今度は娘モモ(二歳)のボーイフレンドのノリ君の家に遊びに行く。ノリ君のパパは湯河原町役場にお勤めである。そのパパが最近「蕎麦打ち」に凝つていて、今日は手打ち蕎麦をごちそうしてくれるというのだ。おみやげに、信州の友人から送つて来たミョウガと、隣のご主人にもらつた松山の銘酒、我が家の庭でとれたセリをもつていく。

蕎麦はうまかつた。なかなかのものである。さんざん飲んで、さつき夜道を親子三人でブラブラと帰つて来た。おぼろ月だ、草いきれの匂いがした。潮

「騒が聞こえる。なかなか充実した気持ちのよい週末だった。明日はまた雨らしい。」

＊五月二十四日（月）

男は

大胆で繊細で

ちよつと子供

友達の森達也氏から電話があつて「今夜、僕の作った番組が放送されるから絶対に観てほしい」と言う。その放送時間がなんと午前三時十五分である。私は早寝早起きの人なのでビデオをセットして寝た。そのビデオをさつき観た。「放送禁止歌」というドキュメンタリーだった。

彼はオウム真理教のサティアンに入つてドキュメンタリー映画を撮った。「A」という映画で、日本では「オウム擁護」と誤解されて上映してくれるところが少ないが、海外の映画祭にはたくさん招ばれている。今では日本でこの映画を観た日本人よりも、

海外の映画祭でこの映画を観た外国人の数の方が多いそうだ。

その彼が「放送禁止歌」というテーマでノンフィクションを撮る。そのメッセージは「いったい規制しているのは誰か？」だった。そして、「それはお前だ」と言わんばかりの映像で終わる。

そうかもしれないが、私は他人から「お前だ」と言われるのは嫌いだ。だからこの番組はちよつと不服だった。森監督はどうか気が小さいから、過激な事をするくせに、最後にメッセージのダメ押しをしてしまふんだな。いちいち「お前だ」って喧嘩を売らなくても、みんな自分で考えればわかるのに。わざわざ余計な事を言うほど気が小さい。男つてみんな大胆で気弱で繊細でもしろい。

今日は「海外取材に行きませんか？」という電話があった。「どこに誰を取材に？」と聞いたら、「神との対話」の著者ニール・ドナルド・ウォルシュのロング・インタビューだと言う。

「あたし英語できないよ」「だって田口さん、去年

もギリシャに長期取材に行ってるじゃないですか」

「だってギリシャ人もあんまり英語ができないから
ちようどよかったんだよ、アメリカ人はダメ」

とはいえ、神様と対話した人と話をするなんていうのは、これを逃したら一生ないかもしれないので、もし実現したらやります、とお答えした。でもこういう海外取材は不景気な昨今、たいがい潰れる。それにしても『神との対話』がなんで日本で大ベストセラーになったのか不思議だ。この本の神様は完全にキリスト教文化圏の神様なのだ。「作者のドナルドも、なぜ日本で受けたのか不思議だって言ってます」と版元の出版社の編集者は言っていた。

石原慎太郎が都知事選で圧勝するくらいだし、日本人はいま強力な父性を求めているのかもしれない。あー、そういうばパスポートが切れていたなあ。

*五月二十五日（火）

あたしって

わりと

暇

実は私はわりと暇である。暇だからこんなに毎日たくさん日記を書いてしまうのだろう。なんで暇かって、仕事していかないからに他ならない。仕事が無いと言うべきかもしれない。否、フリーの場合は仕事は作るものなので、仕事が無いというのは己れの怠慢に他ならないのだが。

なにせ、インターネット以外ではまったく無名の私に仕事というのはめったに来ない。二歳児を抱えてるしなく。受けた仕事は断らないし、締め切りを破った事がないという優等生なのに、仕事は来ない。だからついたたくさん書いてしまうのだ。あはははは。今日は、私が臨床心理学を勉強していた頃、私の教育分析をしてくれていた先生から電話があった。

実は私の兄は三年前に自殺していて、その事をやっと最近になって書いてみたいなあと思ひ始めた。精神病か否かという問題なら兄は精神病ではなかった。限りなく精神を病んだ健常者というところだ。

境界例について先生にアドバイスしてもらいたくて、二ヶ月くらい前に電話をしたのだ。しかしいくら待っていても連絡が来ないので、忙しいんだろうと諦めていた。ところがいきなり今日、電話がかかってきて「この間のお兄さんの件だけど、六月四日なら時間があくよ」と言う。

なんというか、まいった。なぜなら六月四日というのは兄の誕生日だったのだ。こういうことがあるから人生ってのはおもしろい。「その日は兄の誕生日ですよ、先生」そう言うと、先生も驚いていた。臨床の場面ではこうした偶然がよく起こる。少なくとも、兄は私に協力してくれるようだ。

***五月二十七日(木)**

仕事がないければ

叫んでみる

あたしは暇だ

暇で、仕事がない！　と言ったら、昨日はいきな

り仕事が入った。「IBM USERS」という雑誌のエッセイの仕事だった。言ってみるものだなあ、神様はどこかで聞いている。

「IBM USERS」編集部に「ネットコラムニストとして」というタイトルで原稿を書いて下さいとお願ひされたので、そのタイトルで書いたのだけど、あたしってネットコラムニストだったの？　と自分でびっくりした。そんなものになったつもりは全然ないけど、まあ、どうでもいいや。

今日は夜から新宿で、友人の村松恒平氏の出版記念パーティがある。あたしは幹事でもあるし、今夜は久しぶりに業界人みたいな顔をして飲んでやるぜ、と朝から気合いを入れたので五時に起きてしまった。そういえば今日はデジタルメディア研究所の橋川幸夫さんも来る。もともと私がネットで書き始めたのは橋川さんにニフティのフォーラムでサブシスを任されたのがきっかけだった。その時、隣の会議室を無理矢理まかされていたのが、今やインターネットの顔とも言える「まぐまぐ」のふかみえいいちろ

うさんだった。

人生とは不思議なもので、「まぐまぐ」の第一号メールマガジン「えふりぺ」に私が記事を書いて、それを「毎日コミュニケーション」の編集者が読んでもネット上でのコラム連載を依頼してきて、それをマイクロソフトの田中宇氏が読んで「msnジャーナル」に転載し始めたのが、簡単に言えば私の「ネットコラムニスト」としてのスタートだった。世の中つてぐるぐるだなあ。

***五月二十九日(土)**

変な

売れ方をする

私の本

飲んだ飲んだ、久しぶりに徹夜で飲んですごい二日酔いで頭がガンガンだあ。

村松恒平さんの出版記念パーティはとても盛況だった。幹事として大変嬉しい限り。会場のトップス

パー2(新宿TOPSの七階)も落ち着いたムードでとても良かった。なによりも店長の大島洋一さんが素敵。サービスに徹して下さるバーテンダーはお客を元気にする。

私の本『スカートの中の秘密の生活』を出版して下さった洋泉社の石井慎二さん(「別冊宝島」の産みの親である)が「ランディさんの本は、全く奇妙な売れ方をする。こんな本は初めてだ。マーケットが予想できない、誰が買っているのかわからない、でも、売れる。これがネットワークというものかと思いました」と言っていた。

なんだかともうれしかった。たぶんインターネットで私を知っている人が本を買っているから、マーケットが予測できないんだろうなあ。「ランディさんは、我々の知らない読者層を持っているみたいですね」と言われた。そうなんだろうか。だとしたら、凄い事だなあとまず私が驚いた。

新宿で飲んで酔っぱらって、友人のケンさん宅になだれ込み、雑魚寝させてもらった。ケンさんとは

大島で知りあった。デザイナーである。ザリガニが好きでザリガニを探してモンゴルまで行く変な奴だ。変な奴とはいい友達になれるから好き。

二次会から森達也監督がやって来ていろいろ奇妙な話をしてくれた。一番びっくりしたのは「障害者プロレス」というのがある……って話。

「障害者プロレスって、障害者がプロレスするの？」

「そうだよ。僕がびっくりしたのは、対戦相手に『みなしご』が出てきた事」

「み、みなしご？」

「赤コーナー『みなしご』。かたや青コーナー『重度障害者』。『みなしご』は健常者だから、『みなしご』一人に対して『障害者』二人が対戦する」

「なんか、すごい世界だなあ。じゃあ『みなしご』対『早漏』なんて対決もあり？」

「あるんじゃない。『インポ』対『障害者』三人とか」

この障害者プロレスというのは北島さんという人

が興行しているそう。いつも最後のマッチは障害者と北島さんが対戦する。そして北島さんは対戦相手の障害者をボコボコに叩きのめす。そして宣言するんだって。

「俺は健常者だ。俺が勝つに決まっている。これが現実だ。健常者は障害者より強い。そこから出発するしかない」

男のやる事はなんと極端でやんちゃだろう、と女のあたしは思う。女の愛の形はひとつだけれど、男の愛の形は千差万別だなあと思う。世界が多様なのは男がいるからかもしれない。

***五月三十一日(月)**

森の神様

もしもし

生きてますか？

今日も天気良かったので、真鶴の原生林を散策した。

歩いているうちに、いくつかの奇妙な場所を発見

した。散策コースの駐車場にある石段。どう見ても

神社の参道の跡のようだ。急な石段を上りきると、

そこには忽然と何もないが、なんかしらの建物があ

ったような形跡がある。石段の脇に椎の巨木。

御神木だったのかもしれないと思う。

原生林にはもうひとつ神社があった。山の神と呼

ばれている小さなお社。

もしかしたらそこが移転先かもしれないが、石段

の構えからしてかなり立派な神社があったはずなの

に、山の神のお社はひどくみじめだったらしい。

小さな鳥居をくぐってお社の中を覗くと、御神体

の鏡が見えた。

神社の社というのは、神様がいる場所ではなくて

神様への扉だ。たいがいの場合、社の後ろか脇に神

様が降りてくる石か、巨木がある。

何の気なしに社の後ろに回って、びっくりした。

そこにあったのは、巨大な松の切り株だったのだ。

その大きさといったら、直径にして十五メートルは

あった。この原生林に松の巨木は多いが、こんなデ
カイのは始めて見たような気がする。

しかも、その切り株はまだ生木の色を残している。

切られたのはそんな大昔のことではない。

その切り株からは、まだ木の「気」みたいなもの

が立ち上がっていて、あたりの空気を妙に濃くして

いて恐ろしいようだった。こんな切られ方をして気

の毒だ。切り株であつてもあれだけの大きさなら神

様も降りるだろうに。

なんだか、家に帰って来てからも、あの切り株が

気になってしょうがない。